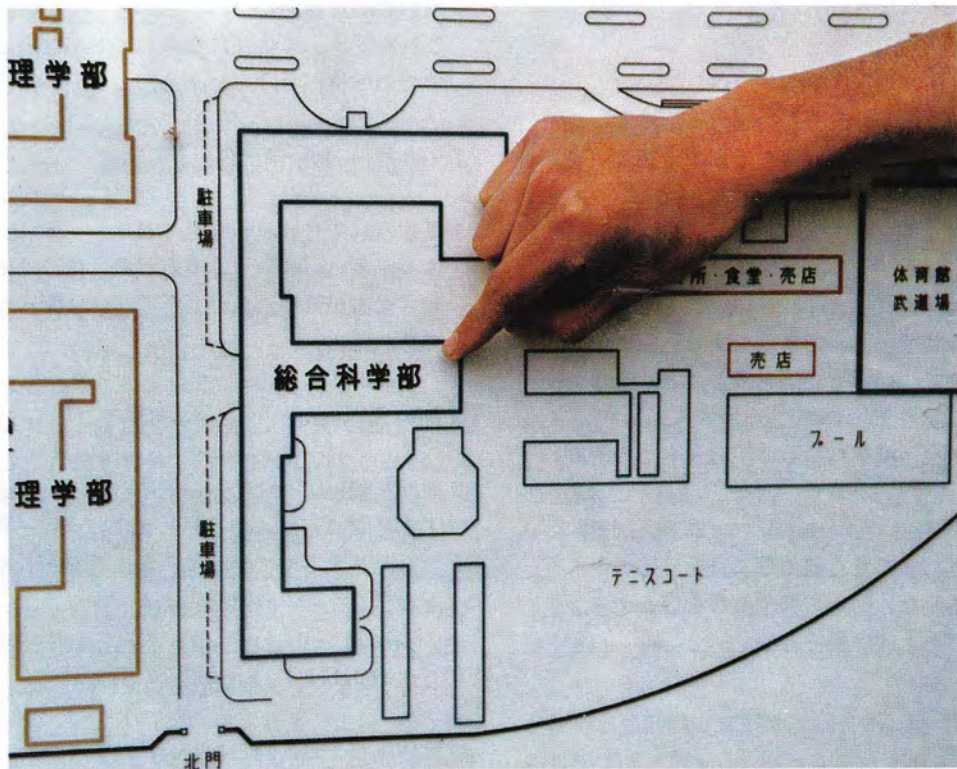




“飛翔”

No. 32

1987年3月20日



特集：変わりゆく総科—コース改組'87—

総科カレンダー'87(上半期)

昭和62年度上半期の行事予定をお届けします。(現時点で不確定な行事の日付は省略しました。)

[4月～April]

- 入学式
今年は定員増、いろんなタイプがいると思います。友達は多くて損はない。
- 新入生ガイダンス
総科ってどんな学部?何が出来るの?少しは真剣に考えてみよう。
- 2年生コース決定・発表
希望通りになって安心した人。良かったね。希望の通らなかった人。落ちこまずに新しい視点から興味を広げよう。新入生は、1年かけてじっくりコースを見極めていこう。
- 前期聴講受付(13日～27日)
自分で時間割を組んで講義を申し込みます。2週間かけて、いい時間割を組むこと。学務へ提出後、確認も忘れずに。
※各種奨学金、授業料免除の手続きもこの時期。
- オリエンテーションキャンプ(25日、26日)
自分の班だけでなく他の班に目を向けてみよう。淋しいあなた、勢いで彼や彼女を作るチャンスです。打ち上げは恐ろしい。

[5月～May]

- 新歓コンパ
1年生はあらかじめバターをなめて出かけるなど防衛策を立てておこう。この頃各種コンパが目白押し、体調に気をつけて。
- 春期総科ソフトボール大会
全員参加を目標に春と秋にあります。自信のある人もない人も、グラウンドに集まれ。

[6月～June]

- 六月祭
1.みんなで店出し→2.お金もうけ→3.打ち上げとなるかどうかは協力したい。赤字を出す店もあったりするんだよ。場所取りが肝心だから、クジ運の強い人を代表にしよう。
- 家庭教師講習会
これを受け、厚生課に登録しておかないと、大学での斡旋が受けられません。

[7・8月～July-August]

- 夏休み(7月11日～9月4日)
休みが長い。ゆーっくり遊べる。免許は早めに取った方が賢明。ただし、通学には使えないので念のため。

[9月～September]

- 前期試験
1カ月間にわたって行われます。コピー機はとも混雑するので早めに!学生証を忘れないこと。忘れたら学務第2係にダッシュ。

[10月～October]

- 秋休み(1日～14日)
2週間のお休み。バイトしても、ボーっとしても2週間。
- 成績発表
1年生は20単位以上はほしい。優一色で染めてしまおう人もいたりして。学生の鑑かがみです。

(文責 小笠原 弘明)

巻頭言

君は何故大学に来たのか？それも何故、総合科学部なのか？何を期待しているのか？はっきり言おう。「君の望む世界」などここにはない。しかしだ、「君の望む世界」は、ここでなら創れる。それが総科だ。

『飛翔』は学生が主体となって創る総科のコミュニケーションの場であり、ナビゲーターである。「君の望む世界」を見せて欲しい。『飛翔』を主張・対話の場として使ってほしい。きっとそれは、「君の世界」を広げ、ひいては明日の総科を創ることになるだろう。

飛 翔 No.32

目 次

インテグレイション	岡本 哲彦	1
特集 変わりゆく総科 —コース改組'87—	編集部	2
改革過程の記録	〃	3
架空座談会	〃	9
総合科学部'96 in 西条	〃	13
他大学の総科 東大・埼玉大	〃	4
筑波大・大阪府立大	〃	6
徳島大	〃	8
窓口案内	編集部	14
「始末書」	〃	15
えっ！プレハブ！？貨車！？ —プレハブ・貨車問題—	〃	17
シリーズ数字 その8	〃	19
退官にあたって ①荒木教官・上垣内教官		16
②高本教官		18
③鈴木教官・松下教官		20
卒論の話	編集部	21
特別研究論文題目紹介		23
就職委員会だより よりよき就職のために	就職委員会	28
61年度就職内定先		29
会社訪問記	片山かおり	30
就職苦労話	編集部	30
総合科学部同窓会	〃	31
新任紹介 佐野教官・中村教官・藤原教官		32
学部の記録		33
飛翔箱 —読者のつくるページ—		34
街の総科	編集部	37
編集後記		38

インテグレイション

総合科学部長 岡本 哲彦



新入生の諸君、入学おめでとう。諸君は、それぞれのモチベーションを自覚して、わが総合科学部を選んだのだろうか。大学生活では、つねに自分のモチベーションを大切に過ごしてほしい。

総合科学部は創設されて13年になる。その間われわれが努力してきたのは、以下のような創設の意図であった。

第一の創設の意図は、「学問の諸領域間の対話」の重視であった。そして従来の学問体系を尊重したうえで、細分化されすぎた学問の発展を反省し、既成の枠をこえる境界領域、学際領域をめざしているのである。

第二の創設の意図は、急速な国際化に対応するための外国語教育の重視であり、外国語教育をとおして広い国際的視野をもつ人材を養成することであった。そのために諸君も、既習および初習の外国語について合計14単位を取得した後も、三年生、四年生で、さらに高度な語学の勉強をつづけるようにしてほしい。さいわい念願の外国語コースも新設されたので、諸君にその気さえあれば、上達の機会は充分用意されている。諸君は文系、理系のどのコースにすすむにしても、四年間をつうじて外国語の勉強をおこたらないようにしてほしい。

第三の創設の意図は、新しいリベラル・エデュケーションの理念を実現することであった。人間の教養に重点をおきながら、学生の知的モチベーションにうながされた広領域の、より裾野のひろい教育をおこなうことである。いいかえると単位のとり方は、古典的なリベラル・アーツの考え方にそって多方面にわたって取得するけれども、これに加えて総合科学部では、それらをインテグレートする方法、混沌と分散のきわみにあるような種々の講義や実験のなかから新しい学問体系を創造していく能力を身につけることをねらいとしている。インテグレイションが実際に実現できるようになるのは、大学院または社会へでてからかもしれない。しかしそのためには基礎訓練を学部時代に受けておかなければ、ま

ずは不可能であろう。

たとえば私の専門分野はエネルギー科学に関係があるが、これを学ぶには物理学、化学、生物学を身につけておかなければならない。それは理学部でもおなじであろう。総合科学部のめざしているのは、インテグレイションへの志向、そのための理論化、そのための技術をたえず考えて学ぶことである。勿論いつも考えているからといって、実現は容易ではない。勉強をはじめて10年や15年はかかるかもしれない。10年、15年という諸君のこれまでの人生の半分かそれ以上だから、ずいぶん長いと思うかもしれない。しかし、インテグレイションの発想は基礎的勉強の繰り返しかから生まれるのだから、簡単には成就できないこともおおい。総合科学部は、諸君の10年先、15年先をみて教育することを考えているし、そのために基礎的知識をきちんと身につけてもらいたいと思っている。学際的であろうとすればするほど、先人の学問的蓄積を、また基礎的知識をしっかり学んで欲しい。うわっつらの体裁のいい議論に目を奪われるな。

総合科学部の教官は出身学部がさまざまである。それぞれの学部がもつ伝統的気質や学問的方法を受け継いで育ってきている。その考え方、姿勢、議論の方法などが違っているから、互いに刺激をあたえ、予想外のところからアイデアが生まれ、それが研究に結実することもある。ときには相手に自分の発想法が理解してもらえなくて、なんと頭の悪いやつかと激昂しても、しだいに教官自身が相互理解をつうじて、新しい世界を知るようになるのである。従来の伝統的な方法を守って研究したほうが楽ではあるが、硬直化は避けられず教育の遅れをもたらすだろう。総合科学部教官は相互に刺激的であることを研究者としての義務と考えている。

新入生の諸君、諸君たちも互いに刺激的であれ。そして教官に対しても刺激的であれ。

特集

変わりゆく総科 コース改組 '87

コースが変わる——いや、「コースを変える」。

学部創設以来10余年を経て、総合科学部は初めての大きなコース改組を行った。特に目をひくのは、情報行動科学、環境科学のいわゆる理系2コースが、それぞれの従来の群を廃して、数理情報科学、物質生命科学、自然環境研究、生体行動科学の4コースに再編成されたことだ。地域文化、社会科学、外国語の3コースと併せ、全部で7つの新コースは、カリキュラムの作成も終わり、63年春の実働を待っている。

目の前に示された資料から情報を得ると、様々な疑問が浮かんでくる。人がなんらかの変化を体験する際に感じる、ごくあたりまえの疑問である。

「なぜ、変わらねばならないのか」、「なぜ、“今”なのか」、「何がどう変わったのか」、「我々は、どう対応すればよいのか」etc.

総合科学部の構成員として、それぞれの立場で、この学部の変化について考えてみる必要があるのではないだろうか。組織や制度というものの生殺が、その運用者に握られていることなど誰もが知っていることである。

『飛翔』では、今回、この「コース改組」についての特集を組んだ。編集部としては、コース改組の是非を論じたり、現時点で出来上っているものを評価したりすることは敢えて行わず、コース改組のあらまし、あるいは全体像を明らかにしようと努めた。

- ・改革過程の記録
- ・架空座談会 —新コース・カリキュラムについて—
- ・総合科学部 '96 in 西条
- ・トピックス 他大学の総科

改革過程の記録

編集部

今回のコース改組の背景には、いったい何があったのか、改革は実際どのように進められたのか——ここでは、改革の過程を追いながら、「コース改組」の1つの側面を描いてみようと思う。

ある理念

コース改組の具体的な流れを見る前に、学部創設時から変わることなく受け継がれてきている総合科学部の理念（仮に、そう呼ぶことが許されるとしたら、であるが）について触れておきたい。というのは、今回の改組において、直接と言わず間接と言わず、その拠りどころとなっているのは、やはりその「理念」だからである。

言うまでもなく、総合科学部は、既成の学問領域間の壁を乗り越えた視野の広い研究と教育を行う「学際的」な学部を目指して昭和49年に創設された新しい学部である。当時の総合科学部の理念は（誤解を恐れずに言うなら）大きく2つある。1つは専門化、細分化されすぎた学問間の壁を越えての境界領域、学際領域の研究を行うこと。これには当然、新しい学問領域を作り出していくことも含まれている。もう1つは、大学教育における一般教育と専門教育との一体化である。そして総合科学部の制度や組織は、この2つの“理念”を十分に実現するように12年前考えられたのであった。

今回の改組は、今述べた2つの理念のうち、学際性の追求の方に重点を置いたものである。ちょっと考えてみればすぐわかるように、学際領域の研究などという新しいことを行う際に必要とされるものは他の何にも増して、まず「柔軟性」である。これは学生や教官等総合科学部構成員の「アタマの柔らかさ」も意味するが、それを生かしきりだけの制度や組織の柔軟性も指している。そこに要求されているのは、積極的な改革の姿勢である。つまり、総合科学部の中には「合わなくなったら変える」という基本的方針がはじめてから存在していることになる。

さて、そのところを踏まえて現実の社会に目を向けてみよう。あたりまえのことであるが、世の中は、絶えず移り変わっている。そして、その変化のペースは年を追うごとに速くなっている。このこと

は社会現象に限らず、学問の世界でも同様である。こと自然科学の分野での変化はめまぐるしいときえ言えよう。ある学問領域が注目されてから、多くの研究により発達を遂げ、その体系が確立されるまで——ありていに言ってしまうと、ある学問領域が「最先端」として持てはやされてから、「時代遅れ」と呼ばれるようになるまでに、いったいどれ程の時間がかかるのか？いろいろな意見が分かれるかもしれないが、まあ、「10年」という単位であろう。学部創設以来10数年が経過した総合科学部である。単純に考えても社会は大きく変化している。ましてや「学際性」を標榜する学部にしてみれば10数年という時間は、制度・組織と内実との間にズレを生じさせ、少なからぬ弊害を引き起こすようになるには充分すぎる長さがあったと言えよう。「合わなくなったら変える」時機が来ていたのだ、理念を実現してゆくために。

おおまかに言えば、今述べたようなことがコース改組の根底にある。それとは別に、学生の臨時増募とそれに伴うスタッフの充実などの問題もあった。さらに、学部内だけの事情にとどまらず、他学部にも関係のある「一般教育」の改善のためのカリキュラムの見直しの動きもあった。また、10数年たつて群の名称とその中身がそぐわないとか、学問分野によっては、もう少し専門を身につけて欲しいというような切実な問題がコース改組を押し進める原動力になったようである。

過程

では、実際にどのような過程を経てコース改組が行われたのか、その流れを追ってみよう。

話はまず、60年の夏に遡る。総合科学部の理念の中に「一般教育と専門教育の一体化」があることは前に述べた。その点からのカリキュラムの見直しは常々言われていたことだったが、60年7月、自然科学系の「臨時カリキュラム検討委員会」の発足に至った。この委員会による「自然科学系のカリキュラムの見直しが急務」という答申を受けて、同年11月に「理科系カリキュラム検討委員会」が組織された。そこでは理科系コースでの一般教育の履修の見直しが行われ、

東京大学・教養学部

歴史的には、昭和22年の新制大学としての東京大学の一部として発足。全学の学生の前半2年間の一般教育を受け持つと同時に、後半2年間の専門教育を教養学部生に行う学部である。全国で最も古い“教養学士”課程の学部であり、設立の目的は、

- ①多くの専門分野にまたがって総合的に対象をとらえる学際的な教育と研究を行うこと。
- ②学生が高度の専門教育を受けるとともに、広くかつ深い教養を修得できること。
- ③新しい外国語教育の理念にもとづいて国際的活動のできる人材を養成すること。

以上の点に置かれている。

教養学部は専門課程として、

- 教養学科第一 (総合文化)
 - 第二 (地域文化)
 - 第三 (相関社会科学)
- 基礎科学科第Ⅰコース (数学物理学系)
 - 第Ⅱコース (化学生物系)

に分かれている。

ご存知のように東京大学では、1、2年時の学生は全員教養学部在籍し、3年時にそれぞれが専門課程である各学部に進学するシステムをとっている。その進学の一部として、教養学部の専門課程が存在

埼玉大学・教養学部

この学部は他の大学の“総科”とは異って、文系の総合学部的性格がある。コースは14コースあり、2年次からの配属になる。コースは哲学・人類学・歴史学・地理学・日本・中国・英米欧研究・社会学・国際関係・社会システムと文系としてかなり広い範囲を含んでいる。各コースとも必修が少なく選択の幅が広がっており、専門の中に基礎科目・関連科目が配置されている。中でも特筆すべきなのは、自由研究コースであり、このコースの専門必修単位は、卒論の8単位だけであり、しかもある範囲内の科目という指定さえもない。つまり専門科目は各コースからどの講義を取ってもいいということである。数さえそろえば卒業はできる全く自由なコースである。うらやましいと思う人もいるかもしれないが、自由というのは裏返して言えば、早くからテーマを見つけ指導教官を選び、履習計画を検討し学習を進める

するわけである。

それぞれの専門課程へは、教養学科は入学時の文Ⅰ～Ⅲ類を多く受け入れ、理Ⅰ～Ⅲ類からの定員は少ない。また、基礎科学科は理Ⅰ～Ⅲ類からしか進学できない。

このような文系、理系各類からの専門課程への定員制限は教養学部にはなく（つまり、教養学部では各目的には各コースとも文系は何名、理系は何名と決めていないということ。）文Ⅰ～Ⅲ類からは基礎科学科へ進学できないことなど考えると、東京大学は専門課程への進学に際して、ある程度入学時の文・理系の能力を重視しているということになる。

一方、各専門課程で目につくのは、必修科目をかなり広範囲に設けているという点である。広島大学総合科学部と比べて自由選択の専門課程での単位数がかなり少ない。つまり幅広い専門科目を必修として取得させるわけである。しかも理系では演習の付随している科目を必修として指定してあり、“幅広く深く”という目的がうかがえる。

全体的に自由な授業の組み立てはやりにくそうな感じがしたが、“幅広く深く”勉強するには合理的なカリキュラムという気がした。ただ学生はかなり苦しいのではないだろうか。

必要がある。自分のテーマを早くから積極的に見つけることができ、自主性に富み、興味の広い人にはとても魅力的なコースだといえる。結局、(本学部でもいえることだが)自由な選択の幅が広ければ広いほど、その分学生はしっかりした目的意識を持っていないと成果は全く上がらないということはあると思う。自由というのは諸刃の剣なのである。

理系不在の理由や、コース間のつながり等、資料不足から来る不明な点も多かったが、弾力的な学問研究の行える学部といえそうだ。

新カリキュラムが検討されたが、その改正案の実施は見送られた。文系のコースではこれと同じ時期、社会文化コースが講座増設の要求をまとめつつあった。さて、それからしばらくたった61年2月、教授会の席で、学部長から「抜本的なコース再編成」の提案が行われた。これにより一挙に話が具体化し、5月には「コース再編成ワーキンググループ」(理系)が発足、その月のうちに、理系を4コースに再編成することが正式に決定した。その後ただちに文部省に提出するための資料「広島大学総合科学部コース改組構成」が作成された。教授会でコース改組が正式に決定されたのは、61年6月4日のことである。その案は文部省に提出され、了承を受けた。

それ以後、改組に基づくカリキュラムの検討が始まる。特に大幅な変更が行われる理科系コースにおいては、先の理科系カリキュラム検討委員会が中心となり、夏休みを返上しての議論が続いた。大枠が決まったのが9月の初めであり、後期の間中、細かい部分のツメが行われた。受験生に対する学部の紹介で広報委員会が多忙を極めたのもこの頃である。

明けて62年。1月末には評議会に新規概算要求内示の報告、定員170名が決定、2月に入って、ずっと検討の続けられていた全体のカリキュラムが教授会で承認された。ここに至ってやっとコース改組が終了したわけである。

模 索

以上のような過程を経てコース改組は進められていったのだが、ここに辿り着くまでには実に多くの解決せねばならない問題が存在していた。より「学際性」を追求するためには従来のコースにおける問題点を明確にすることが必要であり、それをどのように解決してゆくことが検討されなければならない。完べきな制度などこの世に存在するわけもないのだが、改革する以上、望みうるかぎり良いものを造りたいという欲求も当然出てくる。一介の学生に知る術はないが、改革の過程で教官同士のあいだに意見の対立があったであろうことは容易に想像できる。そのような困難を1つ1つ克服し、調整しながら現在に至っているわけだが、取材で明らかになったことについて触れてみよう。

既に来上がってきたものを前に「ふーん、7コースかあ」などというのは簡単である。ところが、この、まるで前提であったかのような「7コース」を決定するのにも紆余曲折があったのである。再編

成は行う、このことに合意がなされても、具体的に何をどうまとめていくかについてまでとんとん拍子に進むわけではない。特に自然科学系において、学問領域の自然な、無理のないグルーピングは今回の改組の大きな課題であった。便利であればそれでよい、というものではない。学際性を謳うが故に、特定分野への偏向は是非とも避けねばならない。また、それぞれのコースの核となる科目も決定する必要がある。幾度討議が重ねられたのであろうか。それだけではない。コースの再編は改組の半分でしかない。さらにあと半分の、カリキュラムの作成が待っているのである。ここでは、これまでのカリキュラムは学生に対して過重な負担を強いていたのではないかという反省がなされ、要望科目の見直しが行われた。それに伴って、一般教育のありかたも議論され、総合科学部における1年次、つまりコースに所属する以前の1年間は、単なる「モラトリアム」に終わらないよう配慮された。

潮 流

今回のコース改組が、どのような理由で、どのように行われてきたか、すこしはわかっていただけたらだろうか。

実際に新コースに学生が所属し、学ぶようになるのは今年の入学生が2年生になる来年の春以降でもあり、まだ実働していない制度について、なにかをいうのは難しい。そこで、ここでは、今回の取材を通して感じたことを述べるに留めておく。

総合科学部は、コース改組という1つのターニング・ポイントを迎えるわけだが、そこには、この学部が持っている性格の1つが強く働いた跡が見てとれるように思う。それは、総合科学部は絶えず「変わっていく」ことを是としている学部である、ということである。一概にそれだけと言い切るつもりは毛頭ないが、このことが改組を進めるうえでかなりの牽引力になっているのは確かである。

「変わっていくこと」を是としている、というのは総合科学部の理念である学際性の追求から生まれてくる性格である。学際領域を探索するという姿勢は総合科学部において、「時代のニーズに応えること」を拒否しない。そして、そのために制度・組織の面で柔軟であることが要求されており、この学部は、変化を辞さない。それどころかむしろ積極的に変化することを肯定している学部であるといえよう。事実、コース改組について話を伺った教官の多くが

改組の理由として従来のコース、カリキュラムでは時代（あるいは、社会）のニーズに応えられなくなったことを挙げている。

このことは1歩間違えば、総合科学部が世の中の流れに迎合し流行りを追う、まさに「時代の申し子」

のような学部として受け取られてしまう危険性をはらんでいる。まともな研究機関、そして教育機関としてそのような誇りを避ける方策は、逆説的ではあるが、やはりその理念にしかない。

総合科学部の意図するところは、決して時代に迎

トピックス 他大学の総科②

筑波大学

筑波大学はよく知られている通り、昭和48年の東京教育大学筑波移転を契機に設立された大学である。東京教育大学の総合移転というよりも、伝統を受け継ぎつつも新しい大学を創設したという感じが強い。建学の理念の要旨は、研究機関としては他の機関との連動を狙い、学際的な研究の実をあげることにあり、国内的にも国外的にも開かれた大学を目指すことにある。また教育機関としては、創造的な知性と豊かな人間性とを備えた人材の育成を目的としている。スローガンとしては“新構想の開かれた大学”という言葉が述べてあった。

とにかく、学群、学類の範囲もあまりに多岐にわたり（便覧と授業科目一覧が分冊で合わせて500ページを越える。）カリキュラム分析は非常に難しいが、特徴的な点は、一般と専門を分けるという考え

方をしていない点である。学生は全学共通の共通科目（総合科目・体育・語学・情報処理・国語とかなりユニーク）が必修で、あとは専攻科目・基礎科目・関係科目の3種類を履習する。それぞれ自らの専攻をより深め、多面的にとらえる手助けをしている。科目として目についたのは総合科目である。これは学群・学類のワクにとらわれず、教官がプロジェクト・チームを作り指導にあたっている。内容はかなり充実していると思われる。

全体的には、学生1人1人に総合的な教育を行うという感じよりも、1人1人に専門的な教育を行い、かなりの専門知識を得た学生どうしをぶつけて、新たな成果を生み出していく印象が強い。

設備の充実・制度の充実はもちろん学生管理が強化されている感を受けた。

大阪府立大学・総合科学部

昭和53年に学部創設、一般教育と専門教育の一体化を学部の形で実現し、豊かな教養と正確な専門知識を兼ね備えた人材の育成を目標としている。

現在は「日本文化」「西洋文化」「人間関係」「計量科学」「物質化学」「生命科学」「計測科学」の7コースが設けられている。各コースには2年次から配属されるが、ここで17単位取得していないと配属が決まらない。（本学部より厳しい。）全学部共通の必修は「プログラミング通論Ⅰ」「科学思想史研究」「総合ゼミナール」であり、残りはコース別必修・コース別選択必修・自由選択という形になっていて、本学部とよく似ている。しかし「総合ゼミナール」は、専門コースに分かれてからの総合科目的特徴を持ち、しかも講義、質疑応答、討論という形がとられている。総合ゼミナールの61年度の題目は「生命論」「脳と人間」「堺」「固体材料のマクロ的性質」「機械と人間」となっていて、各コースからの教官達が指導を行っている。現在、本学部で弱いと言われる各コースへ分かれてからの横のつながりを持つ

ための好例と言えそうだ。中に「堺」という講義題目があり、不可解に思われた方もあるかも知れないが、これは大阪府立大の所在地である堺市を歴史的風土として知り、そこに潜む現代的課題とは何かを考える。主に中世自由都市を生んだ背景としての文化的側面に焦点をあて、遺跡の实地探訪も併せて行っている。理系・文系の学生が入り混じって遺跡探訪を行い、討論する姿を想像して、いい形だと感じた。また、地元根ざした研究題目でもあり、成果が興味深い。総合ゼミナールを行うに当たっては、かなり広範囲の専門分野からのアプローチが必要であり、教官間での連絡・調整等、重要でしかも繁雑な作業が多いことと思われるが、それを実際に行っていることは高く評価できる。

学部全体としては、7コースに分かれている各コースが、かなり広範囲の専門分野を持っており、いわゆる“学際的研究”を行うにはかなり効果的なシステムになっている印象を受けた。

合することではない——あたりまえすぎて、何を今更、というむきもあるかと思うが、「時代のニーズに応える」こととはきちんと区別されるべきことである。この学部がなんらかの変化を求める時に心しておかねばならないことは、まさにこのことなのではないか。それによって、より望ましい自己改革を行い得ると思うのだが。

今回のコース改組はより一層の「学際性の追求」をうたい文句に遂行されたが、教官の側の、「こんな学生を育てたい」という思いを実現するための基礎づくりでもあった。よくお分かりのことと思うが、総合科学部は、その構成員にとっても説明が難しい学部であり、「総合科学」の解釈もさまざまである。自分の所属する学部について、ああでもない、こうでもないと考えなければならぬところに総合科学部の特徴の1つがあるともいえる。そのような学部における教育は、他の学部と同じ感覚で行われるべきではない。送り手と受け取り手、つまり教官と学生とのあいだに、総合科学部で行われる教育についての合意がなければ、その教育の効果は期待できないのではあるまいか。

なにもみんながある共通の総合科学部像を持ち、没个性的にそれに従って進んでいく必要があるといっているのではない。大学教育では、義務教育と違

い学生の主体性が本来求められている筈だ。総合科学部で学ぶことを選択した学生は、当然、この学部がどのような教育をその理想としているのかということを一応は知っておくべきで、それによって、学問の面において、施される教育を受け取る「器」を用意するくらいの姿勢は、あってしかるべきだろう。教官の側には、これこれこういう教育を行い、このような学生を育てたい、という考えを積極的に学生の側に伝えることが、総合科学部の場合特に大切なのではなかろうか。双方の意志の疎通がないままでは、せっかく与えたものも学生に受け取られずに終わってしまいかねない。そのような視点にたってみると、今回のコース改組は、「学生不在」という言い方ができなくもない。まさに今、出来上がってきた制度を前に、学生と教官は、これからどうしていくつもりなのかについて一緒に考えなくてはなるまい。直接新コース、新カリキュラムに関係しない上級生も、それを使って自分の学問を見直してみてもよい筈だ。

学部創設10数年、やはり、まだまだ「創設期」である。

(文責 藤本 貴子)

徳島大学・総合科学部

昭和61年度に教育学部の改組により発足した学部である。これは鳴門教育大学の学校教育学部設立の影響が大きいと考えられる。

改組に当っては、教育学部を一般学部的に改組する目的から、経済、経営、法律系の充実及び人文分野の強化に力を入れたようである。また、他の総合科学部、教養学部のように、一般教育部分を加えての総合科学部でない点に特徴が感じられる。(将来的には教養部包含も考慮されている。)

学部内は総合科学科一学科でそれぞれ

- | | |
|-----------|----------------------------|
| ○ 文化コース | I 人文研究
II 芸術研究 |
| ○ 社会科学コース | I 経済・経営研究
II 行動科学研究 |
| ○ 基礎科学コース | I 数理・システム科学研究
II 物質科学研究 |
| ○ 健康科学コース | I 体育科学研究
II 保健管理研究 |

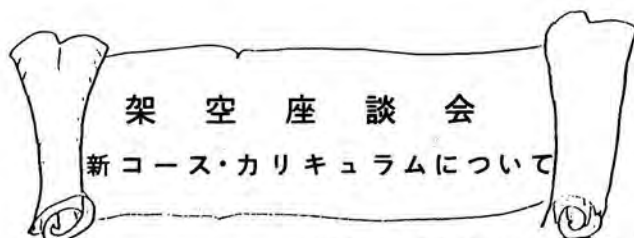
の4コース8ピーク(専攻)に分かれている。健康科学コースというのが目新しくユニークな感じがす

る。カリキュラム的には、まず学科共通科目(プロ通や現代思想の感じ)が各コースから12科目用意され、全学部(学科)生はその中から16単位取得が必修である。また各コースでコース内必修科目があり取得の後、各ピークに入っていく。ピークでは指導教官の指定単位を含め、同コースの他のピークからの単位取得が可能である。他コースの科目の専門を取得することは義務づけられてはいないようである。くわしいカリキュラムが手に入らないため、確実なことは言えないが、各コース、ピークに入った後はかなり専門的な教育がきっちりと行われるようだ。

最後に、学部創設の理念の中で印象深かったのは、「Tタイプ」の専門職業人を養成する、という言葉である。「Tタイプ」とは、Tの横棒が基礎的、複合的、総合的な知識を示し、縦棒が専門的知識を示しており、幅広い知識を元に深い知識を身につけることを狙っている。この目的が成功すれば、これからの時代のニーズに応じた人材養成が可能であり。今後、教員過剰時代に入り、教育学部の総合科学部への改組の好例になり得るだろう。

「広大以外に総合科学部っぽい学部はないか。」
ということで、短い分析記事をお送りしました。資料上の制約もあり、また一方的にこちらからの分析で、とても深い内容とは言えませんが、それぞれの特徴が少しでも理解でき、感じられればと思います。

(文責 小笠原 弘明)



— 出演者 —

- A : (地域文化コース, 男)
- B : (社会文化コース, 女)
- C : (情報行動科学コース, 男)
- D : (情報行動科学コース, 女)
- E : (環境科学コース, 男)
- F : (環境科学コース, 女)

司会 : 飛翔委員 X

黒子 : 飛翔委員 Y

司会 : 今日集まっていたいただいたのは、4月(実質的には来年)から変わる新コースのカリキュラムについて、学生の皆さんの意見をうかがいたいからです。そこで、話を始める前にまだ御存じない方もいらっしゃるかもしれませんので新コースを大まかに御紹介します。

黒子 : はい。まず、地域文化コース。IV群の英米研究がイギリス研究とアメリカ研究にわかれ、5群制から6群制に変わっただけで、基本的には前と同じです。

それから社会科学コース。現代性・国際性・総合性を目指し、様々な諸問題について多角的に解明する社会科学の方法を身につけるためのコースで、従来の社会文化コースとくらべて講義が系統だてとれるよう整理された感じです。

次、数理情報科学コース。情報化社会に対応する学生を育てるコースで、情報I群と環境I群が統合独立したコース。

物質生命科学コース。物理学・化学・生物学の分野から、物質及び生命現象を探究するコース。

自然環境研究コース。物理学・化学・生物学・地学・地理学の知識をベースに自然界のメカニズムを解明し、調和のとれた住みよい環境とは何かを探究するコース。

生体行動科学コース。行動・健康科学と生体科学の面から「いのち」の仕組み、それと精神をつなぐものは何か?という課題を究明するコース。

そして、去年発足した外国語コース。ここは国際性と学際性を柱に2か国語以上の外国語に堪能な国

際人の養成を目指すコースです。

司会 : ということで、新コースの大まかな雰囲気はつかめたでしょうかと思います。そこで、新コースのカリキュラムを皆さんにお配りしますので、気付いたこと、印象などをお聞かせ下さい。

— * — * — * — * — * — * —

A : えーと、実質殆んど変わってないな、地域文化コースは。イギリス研究とアメリカ研究が分かれたんだけど、この2つは今までだってカリキュラムは事実上違っていただけに問題ないんじゃないの。

B : 社会科学も、前の社会文化と基本的には変わっていません。ただ、講義題目が系統別に4つのグループに分けられたので、学生の側から見れば各講義の関係がわかり易くなったと思いますね。

C : オレは情報I群だけど、数学系が「数理情報」として1コースに統合され独立したことで、より専門性が深まったという感じだな。今までは基礎がなかったからな。今回でその基礎が明確になって、いかげんじゃ済まなくなっている。前の情報I群よりよくなってるんじゃないの。

E : 確かに。環境I群にしたって、数学をやる人間がなぜいろいろ実験をやらねばならないのか疑問でしたよ。今回ではその辺が解消されている。ただ、この数理情報コースに「科学史」が入っているね。このコースに所属しないと科学史が専攻できないとしたら文系の人はしんどいだろうね。

F : 自然環境研究コースは、前の環境科学コースのⅢ、Ⅳ群が一緒になってそのまま独立した、という感じね。ただ、これまでと違って一般教育の選択必修科目で数学や物理をとらなくていいようになったわね。その分、自分にとって必要なものがとりやすくなるから、結果として専門が充実するんじゃないかしら。でも、数学、物理が、勉強していく上で必要な面もあるんだけど、楽をするためにこれらをとらない学生が増えるかもしれないわね。

D : 物質生命科学コースだけど、生命科学をやる人はこれまでの情報II群で重荷になっていたI群などの科目をとらずに済み、かわりに生命科学系の科目の中での選択の幅が広がって、やっぱり専門が充実したということかしら。

E：うん。このコースには生命科学と物理学の2つの柱があるんだけど、物理をやる人も従来より基礎ががっちり身につくと思いますね。だけど、生命科学と物理学が一緒になる必然性があるんですか？

D：うーん。確かに余りピンときませんね。ところで、生体行動科学コースですけど、健康科学が加わったことで、他学部まで取りに行っていた科目が自コースで取れるようになるなど、専門が充実してますね。ただ実験が増えて大変そう。

司会：具体的に講義等の面でどういう変化がありましたか？

B：社会文化コースのときには1年後期に“社会文化セミナー”というのがあったんですけど、それに代わって“社会科学基礎論”というのが新しくできました。えーと、これは早いうちからいろんな基礎とか方法論を学んでほしい、ということでしょうね。

E：理系コースに関してはとにかく専門の充実がみられると思う。ただ、実験の数が増えたね。これは負担ではないかな。

D：情報Ⅲ群なんか今でも大変なのに……。

C：それから、数理情報科学コースを見ると結構新しいめの学問があるな。「記号論理学」なんてのがある。こいつぁ、人工知能を意識してんじゃないかな。それから計算機システムシステムの講義があるけど、こう



なるとハードの方面までアプローチできるんじゃないかな。

F：自然環境研究コースの場合、環境科学野外調査っていうのがあるんだけど、化学とかをやる人間にとっては邪魔じゃない？これ。

E：いや、ここは理学部じゃない。総合科学部だ。化学にしたって野外を見る、という要素はいるんじゃないか？

D：生体行動科学コースだけど、健康科学科目は興味があるわね。それから統計学の科目新設もいいんじゃないかしら。

F：自然環境研究コースに得体の知れない講義がある。「遺伝資源学」「自然環境演習」「環境科学特論」など、何です？これは。環境科学コースの私にもわからないんですけど。

E：わからないなあ。

司会：どのコースも全体的な傾向として「専門の充実」があるようですね。すると、総合科学部の旗印である“学際性”はどうなるんでしょう？

B：文科系は別に大して変わらないわよね。

A：うん。やっぱり今回大きく変わったのは理系だろ。

E：理系のコースは、新しいカリキュラムだと一般教育の段階では選択必修科目が共通になったから、一年の時は余りコースを変に意識しないで自由にいろいろできる。その意味で学際性はむしろ一歩進んだんじゃないかな。

D：ちょっと待って。前の情報行動科学コースにあたる分野は、逆に制限ができることになるんです。前は一般教育において「要望科目」はあったけど、選択必修科目は指定されてなかったから情報Ⅲ群は文系からも来たけれど、これで来づらくなると思う。

C：それに、選択必修科目が共通になってコース選択の幅が制度上広がったといっても、「要望」はあるだろうし、ある程度どのコースに行くか絞って講義をとらないとしんどいんじゃない？

D：学際性の問題はムズカシイですねえ。

A：だけど“学際性”って何なんだろう？

E：今は「専門の土台となる幅広い素養」ということだと思うけど。

A：うーん。そうなのかなあ。じゃあ専門に入ったら学際性はいらなくなるのか？

F：自然環境研究コースには、専門の選択必修科目群内に、人文、社会の分野が入っているわね。これは今までなかったことじゃない？専門とどう関わっ



ているのかよくわからない科目もあるけど。

C : “学際性” に関してはいろいろ考えなくちゃいけないところだろうな。“副専攻制” とか “架け橋的な学際” とかいろいろある。ただ、いずれにしてもそれは4年では無理だと思う。まあとにかく、専門としての体制も整ってなくて “学際性” もあったもんじゃないよ。今回の改組で理系はだいぶ “やりやすく” なったんじゃないかな。

司会 : 総科には “何をするか入ってから決める” という部分がありますよね。理系の人も文系に行けるし、文系の人も理系にいける。また、転コースをする人もいます。これは今回の改組ではどうなりますか？ これもある意味で “学際性” の指標だと思うのですが。

A : 何にしたって、文系から理系というのは相当努力がいるなあ。

F : これまでの環境科学コースだと、群に関係なく一般教育で数学、物理をとらないとだめだったけど、自然環境研究コースだとそういうことがないから、文系の人も理系コースに入りやすくなってると思うわ。転コースも前より容易なんじゃない？ 特に理系内だと2年次まではそれがかなりできると思うけど。あとは本人の努力ね。これは変わらない。

D : でも、さっきも言ったように、行動科学系統に文系から来る人は減るんじゃないかしら。一般教育に選択必修が入った分だけ。

C : ただ、前の情報行動科学コースにあたる分野を除いて理系コースの場合、一般教育での制約は一樣に少なくなったから、一年生の時にどのコースに行くか、そのために何が必要かを自分で考えていかなきゃならないだろうな。

E : どんなカリキュラムにしても、自分でこだわりをもっていかないと何となく4年間過ごしてしまうという恐さが総科にはありますね。

F : そうね。安易な結論かもしれないけど、結局 “自分” なのよね。

E : そうだね。

B : ただ、“自分” で決めるにしても、その時に “学際性” は意識しておいて欲しい、と私は思う。

司会 : それでは最後に、改組全体を通して心配することは？

A : まず旧カリキュラムの人間はどちらのカリキュラムに沿って講義をとればいいのか？

黒子 : お答えします。旧カリキュラムの人間はそのまま旧カリキュラムに沿っていくことになります。それから、新カリキュラムの講義は “読みかえ” という形でとれるものもあるそうです。

A : ぼくらは今まで通りでいいわけだね。

E : 新1年生がコースに入ったときの新歓はどうなるんだい。それから今の2年生の追いコンはどうなる？

D : それ以外にも、“先輩がいない” ということのハンデは大きいわね。

A : 実質、新しく学部ができたようなもんだ。文系はそういうわけでもないけど。

B : それから、今度は横の関係の問題でコースが多くなったことで横のつながりって希薄にならない？ ましてや定員が増えるし……。

C : やっぱり上級生もその辺のところを考慮して、自分からも積極的に後輩に接触すべきだろうね。

D : 入ってくる学生って、どんな学生かな……。

A : 外国語コースには外語大から流れてくるやつが多いんじゃない？ 勝手な推測だけど。

D : この新しいカリキュラムで一体どんな人間が育つのかなあ？

A : 専門に凝り固まるだろうな。

F : そうとは限らないんじゃない？ とにかく今度のカリキュラムは学生自身の積極的な意志が求められている様な気がする。それ次第でどうにでも学際的になるカリキュラムだと思うけどな。

C : “学際性” うんぬんは基礎がないとだめだと思

う。とにかく今度のカリキュラムでは、基礎のしっかりした、その上で幅の広い見方のできる人間を育てることが前提なんじゃないの？とにかく今度で、その“基礎”の部分は前よりよくなると思うな。

B：さっき、コース数も増えるけど人数も増えると言ってたでしょう。そうすると、このスラム的狭さを誇る千田キャンパスのどこに増えた分を吸収する余力があるの？

A：まず、学生研究室は確保できるのか？今あるやつだってどうなるのかわかんないのに。

E：1年研究室なんか人があふれて、1年生間のつながりに問題が出るかもしれない。

D：でも、64年に教育学部が移転したら、そこが使えると聞いているからなんとかなるんじゃないかしら……。でも、一年間は不自由するわね。

A：「ここは鉄道博物館か」と錯覚させる例の貨車だけど、ひょっとしてまだ増えるのか？あれ。

F：教室も足りなくなるんじゃない？稼働率も相当なものよ。

C：うひゃーっ。青空教室か!?(笑)

F：とにかく、これからの総科の行末をしっかりと見守って、ある時は考え、ある時は行動しなくちゃいけない。

A：こりゃ、大変だ。

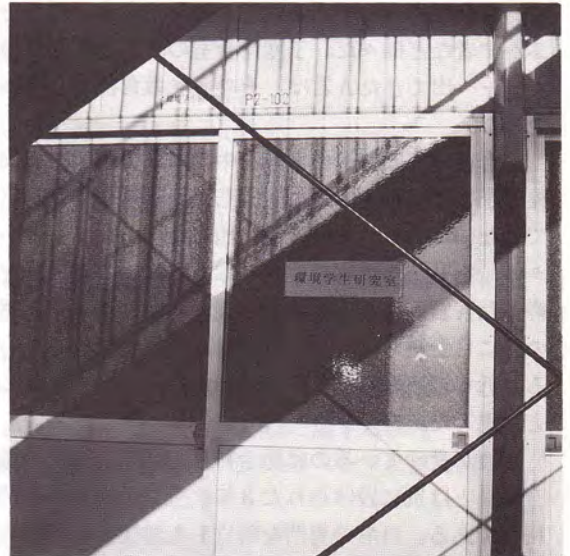
E：施設はいずれ西条に移転するし、カリキュラムも十何年か先、また変わるかもしれない。そのためにも、新1年生は困ったこと、不満、希望を遠慮なく出すべきだろうね。

D：そうね。

司会：なんとかまとまりがついたようですね。今日はどうも有難うございました。

(文責：吉田雄一郎)

(注：当座談会は編集委員の取材をもとに、編集部が座談会の形にして編集し直したものです。)



1996年5月中旬のある朝。地域文化コース3年のA君はバイクに乗って登校してきた。授業が始まるまで少し余裕のある時間帯、小鳥のさえずりがうるさいくらい響いている。

構内にはいると正面に同じような形の建物が二つ並んでいる。これが総合科学部の本館だ。向かって右側が教室のある教育棟、左側は研究室等のある研究棟である。A君はすぐに右折し、地下道を通して教育棟地下の駐車場に入ってしまった。後から来た車は脇を通してさらに下りてゆく。地下1階はバイクと自転車、2階が自動車と分けられているのだ。かなりゆとりのある広さである。地上は一部を除いて自動車・バイクは通行禁止だ。もしうっかり違反すると、総合科学部の内規でしばらく乗り入れを止められることになる。

A君は階段を1階のロビーへ上がった。もう人であふれている。広々としたロビーの一角には通行の妨げにならないように椅子とテーブルが置かれていて、自動販売機まである。書き物をする者、煙草をふかす者など様々だ。丁度待合室のような雰囲気。ロビーへ出てきたA君は、そのまま教育棟を3階へ上った。

総合科学部は双子の本館を中心に、資料庫や実験棟等小さな建物を周囲に配置して地下道や渡り廊下でつないでいる。本館裏手は池になっていて、青いタイルを貼った建物の姿を写している。1コマ目を終えたA君は、2コマ目の講義をうけながらふと窓の外に目をやった。柔らかな緑が遠くまで続いている。近くの藤棚もそろそろ見頃かな。彼はそんなことを思った。

今彼が受けているのは総合科目である。従来の総合科目とは別に設けられた3年次生以上の為の専門科目である。自らの専門を確立した学生がその他の分野に対する理解を深めるようにと考えられたもので、内容は濃い。

2コマ目の授業を終え、食事を済ませたA君は研究棟へ足を向けた。教育棟から渡り廊下を渡った所に学生研究室がある。各コースと一年生にそれぞれかなりの広さの学生研究室があるのだ。勉強や談笑の場になっているのは相変わらずだが、時折院生ら

が語る東千田時代のプレハブ研究室は遠い過去の事のように思える。A君は友人と談笑しながら午後の授業の準備を整えた。

3コマ目はゼミであった。セミナー室は学生研究室のすぐそばである。A君の出たゼミは中近東特論。最近急が増えた留学生の中にサウジアラビア出身の人がおり、彼を中心に進められている。今日は特にサウジの社会問題に的を絞った。活発な質疑応答と討論が続く。このゼミに加わっているのはA君の様な地域文化コースの学生ばかりではない。外国語、社会科学、さらには自然環境科学コースの学生も加わっており、時には指導教官以外の教官まで顔を出すこともある。熱中しすぎでの時間超過は毎度の事である。

今日も10分程超過した。A君は急いで4コマ目の教室へ向かう。数理情報コースの専門、位相数学である。興味を抱いて取った授業だがやはり難しく、彼は四苦八苦の状態だ。それで時に数理情報コースの学生研究室に行って教えてもらうのだが、数学的な考え方に彼はしばしばうならずにはいられない。もっともそれは彼らも同じ事で、地域文化の研究室で人類学や民俗学の教科書を前にして頭を抱え込む数理情報コースの学生の姿が度々見られる。

4コマ目の授業を終え、A君は一息つこうと研究室に戻った。ドアを開けると、丁度自主ゼミの真最中である。相当白熱した議論が戦わされていた。教官と約束があった彼は自主ゼミを邪魔しないようにしてしばし時間をつぶしていた。

A君の会った教官はコース審議会の一員である。前回のコース改革の反省から生まれた組織で、常に総合科学部内の制度の再検討を行っている。しばらく雑談をした後で、彼はぼつりとう言った。

「そろそろ、もう一度再編成の必要が出て来てますね……。」

A君はバイクを地上へ出した。まだ冷たさの残る夜気の中、満天の星と鏡のように大学と市街地の明かりが灯っている。明日も快晴のようだ。

(文責 青山 幸樹)

窓 口 案 内

編 集 部

1 学務第一係

○ 聴講手続 総合科学部の聴講受付期間は2週間です。受講したい講義を決めたら、最初の講義の時先生が持ってくる聴講受付表に学部、単位の必要不必要、学生番号、名前を記入します。二週目には受け付けない講義や、人数が多すぎて受け付けてもらえない場合もあるので注意すること。それから聴講届を提出用・本人控用共に記入します。履修区分を間違えて後で泣きを見ないように。手続期間終了後、約二週間以内に聴講確認があります。自分がとっているはずの講義に間違いなく登録されているかどうか確認して印鑑を押します。(サインでも可) 一日だけなので掲示を見落さないように。

○ 履修単位の確認 三、四年生は前・後期始めに履修単位の確認ができます。指定の用紙にこれまで取った単位を履修区分ごとに記入して提出します。それに誤りがあれば朱書されて戻ってきます。

○ 各種証明書 成績証明書、卒業・修了見込証明書、卒業証明書、学位記授与証明書、免許状取得見込証明書、在学証明書は、「証明書交付願」(カウンターの上にあります)に記入して提出します。交付は翌日以降。印鑑はいりません。

○ 他学部受講 受講したい学部の学務でマークシートカードをもらって講義題目を記入、提出します。同時に学務第1係に通則第19条による聴講願を提出します。他学部では聴講受付期間が短かく、第一週から授業もあるので注意。聴講確認は各学部で行われます。

2. 厚生補導係

ここでは証明窓口のあまり知られていない手続を取り上げます。

○ 遺失物 遺失物はA(金銭その他貴重品)とB(それ以外)に分かれ、Aの引取には印鑑、Bの引取には学生証が必要です。物をなくしたらすぐ厚生補導まで申し出て下さい。学生番号、氏名が書いてあれば九分九厘手元に戻るそうです。

○ 用具貸出 「備品貸出簿」に記入して借出します。但し、2日におたり借出すことはできません。

○ 施設利用 教室・グラウンドを使用したい時は「施設使用届」に記入して提出します。(サーク

ル関係は学生課へ)

○ 通学証明書 南側から事務へ入って左側の戸棚に「学部別申込台帳」があります。記入して翌日以降の交付です。

○ 学割 「学割申込書」に記入して学部別のケースの総合科学部の所に入れます。翌日以降窓口の真向いにある学部別のケースに入っているのセルフサービスで持って行くこと。年間10枚まで。

○ 学生健康保険組合 「診療報酬証明書」をもらって、病院で記入してもらい、厚生補導に提出します。約一ヶ月で銀行に振込まれます。郵便口座や農協口座には振込まれません。

○ 学生教育研究災害傷害保険 窓口で申告して保険会社宛の葉書をもって出します。治癒後治療代を請求し、約一ヶ月で銀行に振込まれます。

○ 就職資料コーナー 事務のドアから入って正面に就職関係資料のコーナーがあります。少し入りづらいかもしれませんが、気軽に入ってみて下さい。総合的資料、過去の求人票等が完備しています。就職の相談にも応じられるそうです。

(文責 田中 誠)



「 始 末 書 」

編 集 部

春です。総合科学部のみなさん、あなたが「大学」という名の機関にかかわり始めて、何度目の春でしょうか。大学とは学問をやる場所、という大前提は別として、「何でもできる」「何をしてもよい」ところ（もちろん、個人個人の責任において）であるという考えを持っている方、又は持つようになった方も多いことでしょう。確かに、私生活の部分では学生が大学側に管理されることはほとんどないと言っても過言ではありません。しかし、何人かの人間が集まって、共同で何かを行う場合、そこには必ず何らかのルールが必要で、そして、そのルールを厳守できなかった者には、必ず何らかのペナルティが与えられます。たとえそれが形式的なものであっても、です。「学生」と「教官」と「事務職員」が集まって、共同で「学問研究」を行う大学の場合、そのルールはおもに教務関係のものであると言えるでしょう。そしてそのペナルティのひとつが「始末書」です。

始末書などと言うと、暗く、懺悔の響きがありますが、実際はそう恐れるほどのものではありません。まず、様式は原則として自由。レポート用紙などに不始末の理由を書いて、指導教官（チューター）の承認印をもらい、学務に提出します。提出期間内に聴講届を出さなかった、という理由で書かされる場合が最も多く、逆に始末書を書けるということは不始末が認められるということでもあるのです。

また、二重聴講でコンピュータにエラーが出ている場合は、「聴講取消理由書」を書きます。聴講を取り消したい授業科目と担当教官を明示し、何故期間内に取り消しができなかったのか、また処理しないとどうなるのか、を詳細に書いて、担当教官の承認印をもらいます。いずれにしろ、そうややこしい手続きをふむ必要はありません。また、学生自身が聴講届提出の時点で、何らかの理由で二重聴講し、聴講確認で指摘された場合は、即座にどちらかの授業を取り消し、教官のところへ行って受付表にある自分の名前を消せば、始末書を書かないで済む場合もあります。

次のケースは非常に特殊な例ですが、昨年度前期に実際に起こったものです。地域文化コース2年の

Aさんは、自コース専門授業として「〇〇〇〇研究」と「〇〇〇〇特別演習」という、〇〇〇〇に同じ名詞の入る同じ教官の授業を選択しました。聴講受付期間の第2週めに受付表の欄外に記名し、聴講届も期間内に提出しましたが、何故か欄外に書いたAさんの名前は消えていたのです。聴講確認の時点でそのことに気付けばよかったのですが、同じ教官の授業であったため、ついよく見ないまま認印を押してしまったのです。授業の行われている間、Aさんは真面目に出席し、教官にも出席を取る際、名前を呼ばれていました。にもかかわらず、レポートを提出し、成績表を受け取る時になってはじめて聴講ミスだったことに気付いたのです。解答用紙に名前を書き忘れた場合には、評価欄には※が記されますが、Aさんの場合は講義題目も記されていなかったのです。一度はあきらめかけたAさんでしたが、学務に相談したところ、双方のミスということで、始末書を書いて単位が認められたのです。

彼女の場合は特例ですが、聴講受付期間は授業をしないという教官が多く、学生は時間を持て余し、つい聴講を頼んだり、頼まれたりした結果、聴講ミスが生じることも少なくありません。面倒でも、聴講手続は自分ですること、しかしそれでも人間ですから、つい…といった場合もあるでしょう。その時は慌てず、騒がず、学務の方々に相談しましょう。失敗は誰にもあること、「始末書」について少しはわかっていただけでしたか？

(文責 鈴木 美緒)

退官にあたって① (略歴は編集部)

定住と放浪と

荒木 博之



日本人には定着型と放浪型があると私は思っている。いいかえれば、前者は農耕民型、後者は海人族型と考えることができるだろう。

私個人はといえば、どうも海人族型に属しているのではないかと思っている。農耕民型と海人族型の違いは、未知の世界に対する姿勢の差ともいい得るかも知れない。

農耕民は普通未知の世界に対して不安をもつ。これに対して海人は未知の世界をいつもバラ色の世界と思込んでしまう。私はつつい山のあなたには仕合せが住んでいると思ひこむたちである。そしてそれが裏切られてもさらに遠い山のあなたこそ仕合せが住んでいるだろうと勝手に決めこむ。

日本文化のなかでは一般にヶ所に定住しない人は疑惑の目をもって見られがちである。基本的に日本人が稲作耕作民であるからである。

しかしながらその農耕文化のなかに海人的要素も組みこまれていたはずである。でなければ稲作文化が波濤を越えて、たとえば中国の江南の地からもたらされることはなかったはずである。そしてその海人の文化が日本の歴史のなかの開放と閉鎖の開放の部分を受けもっていたのだと思う。勿論一国の文化は開放のみによって成熟するものではない。文化を熟成せしめるには、定住と閉鎖の部分が必ず必要とされる。ただ私のような人間は文化の熟成という民族の実歴にはかかわることができないのだと思う。

不思議なことに、いやあたりまえの事なのかもしれないが私の今住んでいるところは海人族の一大根拠地であったといわれる宗像の海岸である。しかしこの宗像海人十年後にはどこに住んでいるのか、それは神のみぞ知り給うである。

(外国語コース 英語)

御専門は英語です。昭和27年に京都大学で大学院文学研究科修士課程を修了されていますが、昭和24年から約1年、占領軍宮城軍政部の副官室付通訳として御活躍されました。昭和30年から福井大、高知女子大、鹿児島大、立命館大、愛媛大、宮崎医科大学等で教壇に立たれました。昭和52年に総合科学部に赴任され、以後10年にわたり数多くの学生を相手にその英語力を伸ばす事に全力を傾けられました。

吟啄同時機

上垣内 孝彦



「老兵は死なず、ただ消えさるのみ」の言葉を残して、ダグラス・マッカーサーは米国に帰った。コーンパイプをくわえて厚木に降り立ち、日本占領連合軍最高司令官を解任されるまで、彼は颯爽としていた。この言葉は黙って消えていこうとする私への挽歌として、胸に揺らめき続けている。なのに、飛翔編集子より一文を強いられて、苦吟数日……。 「鳥の死なんとする、その声や悲し、人の逝かんとする、その言や善し」に拘泥していることを悟る。そこで、尊敬した先輩田辺昌美教授から伺った言葉について認めることで、責を果たさせて載くことにする。

仄暗いバーで、ブランデーグラスを片手に寛いだとき、何かの弾みに、「君、吟啄同時機ということを知ってるかい」と尋ねられた。返事を躊躇していると、鶏が卵を温めて、ひよこが孵る瞬間の情景をとつとつと語られた。

「20何日間か母鶏の胸の下で温められて育った雛が、ひよこの姿を整えて殻の中で、ツ、ツ、と微かに鳴いたとき、それに呼応して母鶏が嘴でコッコと殻を叩いて割ってやるんだよ。これは早すぎても遅すぎても駄目なんだ。このツ、ツ、とコッコッが吟啄のことだ」 しばらくして、

「これは教育の本来的な姿であると、北条時敏さん（広島高師の初代校長）の言われたことだ」と諄諄と説いて下さった。その時、私はその雰囲気と言葉に痺れる程酔ったことを今でも覚えている。決してブランデーにはではない。

蛇足を加えると、振返って見て、私はそれを地で行くような教育の現場をどれだけ経験したであろうか。受験指導とか卒論指導とかの資格獲得の外的条件でしか、その situation が得られてない。何と残念なことだろう。

(環境科学コース 基礎科学研究)

御専門は物性物理学です。昭和23年に広島文理科大を御卒業後、昭和33年から皆実分校で教鞭を執られ以後教養部 — 総合科学部という一般教育担当部門の変遷を体験して来られました。その間、昭和36年には理学博士の学位をとられ、また昭和48年から51年まで、評議員の大役も果たされました。

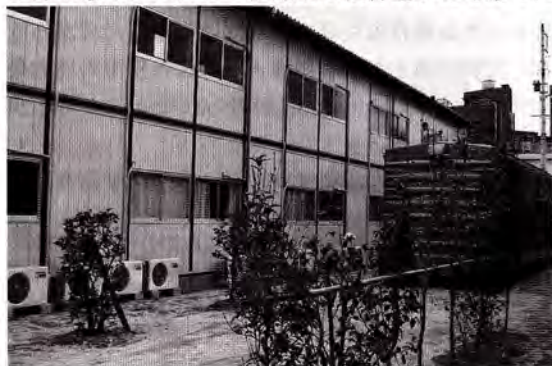
えっ！プレハブ！？ 貨車！？

編集部

もう半年程も前のことになってしまったが、夏休み頃、学校へ行くと「あれー！プレハブが変わった」とか「なんでこんな所に貨車があるんじゃろ」とか、そんなふうに思った人もいるのではないだろうか。或いは、夏休み中に、プレハブに移られる先生方の引越しのアルバイトをした学生もいるかもしれない。どこかのアパートのような2階建のプレハブと、どうしても“大学”とは結びつかない貨車を最初は、何となく違和感をもって眺めていたものだった。

私にとっては、もう遠い過去のものになってしまったが、あの古いプレハブを覚えておられるだろうか？（そうそう、ダムや橋の工事現場や、小中学校で、生徒の急増のために教室が足りなくなった時に、校内の片隅に建てたヤツです。）あれは、もともと昭和45年医学部で建てられたプレハブであった。それが、48年から、総科で使用されることになったのだが、当初は、61年8月まで使用するはずではなかったようである。何故か？——もう、お分りだろう。西条への移転が遅れているからである。では、何故プレハブを建てかえることになったのか？——驚く勿れ実はあのプレハブの耐用年数は、たったの8年なのである。にもかかわらず、その約2倍もの年月の間使用していたからである。（あのプレハブ、もっといたわってやればよかった……ネ）そう、全ての原因は、もともと59年春には移転するはずであったのが67年まで遅れたことにある。

古いプレハブに比べると、とてもモダンな、新しいプレハブ、その1号棟には20、2号棟には22、計42部屋ある。これまで相部屋の教官室が41もあった



のだが、現在その数は非常に少なくなっている。これは建てかえの恩恵を被った点であるが、当初、心配された問題がいくつかあったようだ。まず寒暑の問題、これは冷暖房装置の設置で解決、次に騒音の問題。これは心配した程でなくOK。次に狭いということ。実際に入ってみると、何か窮屈な感じがする。初めは、1部屋19㎡で申請していたらしいが、結局、現在17㎡である。旧自然科学棟の教室が29㎡、新館が25㎡、新々館が22㎡、この数字からも、かなり狭いのは明らかである。

このスペースの狭さを解消するために考えられたのが、本を“貨車”に収納することであった。授業中、ずっと遠くで雷が鳴っているのか、飛行機が随分低い所を飛んでいるのではないかと思わせるような、何とも形容し難い音を耳にしたことがあるだろう。あれが、貨車を開閉する時の音かと、後で知って納得したことがある。“貨車＝倉庫”という発想は福山の付属中高校で、貨車をクラブハウスとして利用していることがヒントになっているらしい。値段が安く、丈夫な貨車の廃物利用が、一石二鳥にも三鳥にもなるというのだ。しかし、先生方にとっては本がどこにいったかわからなくなったり、自分が読みたい時に、すぐ手にすることができない等、なかなか不便であるらしいが、止むを得ない。差し当り昭和64年の教育学部の移転が完了するまでは、今の状況が続くようである。移転後の教育学部の部屋を利用できるらしい。

特に県外出身の学生が、広大なキャンパスは狭いとか、汚いとか、受験案内の表紙の写真に騙されたとか言っているのをよく聞いたものだが、実際、狭いし汚い、その上、西条移転が決まってから（か、その前からか、私は西条移転が決まる前の大学を知らないの）増えるのは、今回取り上げたような、プレハブだの貨車だのといった、応急or臨時施設ばかりのようだ。大学にふさわしい景観というものがあるかどうかかわからないが、あるとすれば、広大はその足元にも及ばないだろう。——もっと広々とした、きれいなところでキャンパスライフを送りたかった——仕方がないといえばそれまでだが、こういうキャンパスで学生生活を過ごさねばならないなん

て、何とも寂しいことではないか、とか、こんなに汚いキャンパスで大学生活を過ごした人なんて、そうないだろうから、日本の大学生全体からみれば希少価値があるんじゃないか……と聞き直ってみたり、大学の環境よりも、自分自身の生活が、充実してればいいんだと強く思ったりする此頃である。

(文責 新迫 明美)

退官にあたって②



雑感 (健康と余暇と)

高本 友彦

今や、わが国は人生80年時代の到来であり、名実ともに世界一の長寿国である。この長寿社会を生き続けることは、過去の人々が経験し得なかった長い成人の期間を過すことを意味する。これを諸君と同年代について例示しよう。約50年前、昭和10年の20歳男女の平均余命はそれぞれ40.4年、43.2年であったが、昭和59年の同年齢の人々の平均余命はそれぞれ55.6年、60.9年となり、約16~17年も長生きしていることになる。諸君の余命の長さを実感してもらえと思う。

このように長くなった一生を酔生夢死で終ることなく、積極的に社会に参画し、快適な生活を送るための基礎として、先ず心身両面にわたる健康があげられよう。さて、20歳以上の人を対象とした健康状態に関する調査結果によると健康であると答えた者が90%を越えている(「大いに健康」42.1%「まあ健康」48.5%)。しかし一方で、現在の生活の中で感じている不安、悩みについて尋ねると、「自分の健康」をあげた者が38.1%、「家族の健康」が35.9%と上位を占めており、健康に対する関心の複雑さを浮きぼりにしている。

では長い生涯にわたる健康な生活を送るためにはどうすれば良いであろうか。それには、今迄の人生50年時代から引継がれてきた生活観、社会観を切り換え、多彩なライフスタイルの中で健康生活へのアプローチが求められることになるであろう。

次の問題としては、生活時間の変化の中で余暇の増大への対応が考えられる。かなり修正されてはきたが、労働(仕事)＝善、余暇(遊び)＝悪という思想は完全に払拭されたとはいえない。デニス・ゲ

イバーは、現代文明が直面している三つの重大危機の一つに「余暇の時代」をあげている。そして、余暇のための教育はもっとずっと早くから始めなければならないし、それより適切には、複雑な文明における幸福のための教育と呼ばれるべきものであると指摘したのは1963年のことである。既に20年を経過したが、余暇教育への積極的対応がなされていないとは考えられない。

小生の今後の課題は、健康づくりのための余暇時間の有効利用の究明と考える昨今である。

(保健体育講座)

御専門は保健体育です。昭和20年に東京体育専門学校を卒業された後、郷里の熊本県に帰られ旧制宇土中学・御船中学、新制熊本女子高等学校に勤務されました。昭和30年に当時の広大皆実分校に赴任され、以後教養部・総合科学部という変遷の中で学生の体力向上に努められました。また体育学部の創設にも情熱を燃やされ、自らの教官室に創設準備室の看板を誇らしげにかけておられました。

広島市内に久しぶりに雪らしい雪の降った日のことである。数日前からこの原稿の催促を受けていた私は、その日一日、それこそわごとのように「鍵、鍵、鍵……」と繰り返していたのだった。暗くなってなお降り止まぬ雪の中を「鍵」のことで頭をいっぱいにして、私は家に辿り着いた。コートの雪をパサパサと払い落とし、ポケットに手を突っ込む——と、ない。ドアの鍵がない。右じゃなきゃ、左。えーっと、スカートにポケットはないし、バッグ、バッグ、と。

出来過ぎた話で恐縮だが、私はその日、鍵を持って出るのを忘れたのであった。同居人が戻るのは何時になるのだろうか。虚しくドア・チャイムを鳴らした後、私はその場にうずくまった。

別に恨みがあるわけではないが、鍵というのは相互の不信が形をとったようで何となくいやらしい感じがする。これみよがしに嚴重な鍵というのは、自意識過剰の表れのように好きになれない。そう大袈裟なものでもなく、例えば鍵のついた日記帳というのは、まあ好き好きであろうが、私など持ち主の情念がその周りでねばついているような気がして嫌である。

家の中にはただ一人自分だけ。玄関には鍵がかかっている。他に誰が入ってくるわけでもないのだが、その人はトイレに入った際には鍵をかける。単なる習慣と言ってしまうばそれまでだが、さて、さて。———というのは、以前何かで読んだ話だが、その時に、ワン・ルームで暮らす学生にもあてはまるな、と感じたのを覚えている。鍵をかけるという行為を、人はもはやある種の強迫観念でもって実行する。

お伽話によくある話。城の古びた塔にお姫様が幽閉される。(閉じ込める側は、人も理由も様々だが、閉じ込められるのは、かなりの確率で美しい姫君。まァ、それはよいとして) ドアに鍵をかける理由はおそらく2つ。姫君からソトの世界を取り上げるためと、ソトの世界から姫君を取り上げるため。(“取

り上げる”という言葉は、しばしば“護る”という言葉で言い換えられたりもするのだけれど。)

幼い頃は、鍵は第三者から何かを護るためのものだと思っていた。もう少し年がいくと、護るべき何かには「価値」というものがくっついていることを知った。今では、人が皆でよってたかって、金や家や土地などというものに、価値があるとしてしまう仕組みを面白がるようになった。いったい世の中には、「価値あるモノ」を護るための鍵がいくつ在るのだろうか。気の遠くなるような「思い込み」が、同時にそこには存在している、そんな気がするのだが。

牢獄に鍵がつくのと、金庫に鍵がつくのと、どっちが早かったのかな、と考える。最初に鍵をつけることを思い付いた人間は、はたして男だったのか、女だったのか。その彼、或いは彼女は、誰から何を護りたかったのか。

鍵をかけるということは、多分に一時的なものである。いつか鍵は開けられる。封じ込められたものはおそらく開けられるが故に、価値を持ちうる。思い込みの上に生じている相互不信を具現した鍵は、そして安心を提供してみせる。鈍く光る鍵のあざとさ。

———というようなことを、私は、降る雪を眺めながら寒さとひもじさとで朦朧としている頭で考え続けたのであった。

2138———総合科学部にある、正確には錠の数である。もっと言えば、この錠すら、公の、学生が比較的容易に目にする事の可能な錠の数でしかない。
(文責 藤本 貴子)

退官にあたって③

停年を迎えるにあたって

鈴木 修次



昭和51年の4月に、広島大学に着任して以来、11年を経過して今年の3月に、停年を迎えることになった。決して長い年月ではなかったが、新しい学部である総合科学部のアジア講座の充実のために、いささかの努力をしてきたつもりである。着任当初は、アジア講座をどのような方向に持っていったらよいかという問題に心をなやますことが多かった。そしてさらに、講座のあり方に沿って人材を集めなければならないので、そのためにかなりの時間を費した。幸に多方面の方々の御協力をいただいて、当時は日本の大学において始めての構想であったアジア講座を推進させることができた。在任中に、総合科学部の大学院が発足できたのも、うれしいことであった。

私は東京生まれで、ずっと東京で生活していたので、広島のこととはほとんど知らなかったのであるが、当地に来て以来、広島市のいろいろな方々と接することができて、現在ではそうした方々と、広島を本場の意味で国際都市にするためにはどうしたらよいかという問題について、いろいろと意見を交換しあう機会を持つことができるようになったのも、ありがたいことだ。停年を迎えた後は、私も広島に定住して、そうした方々と共に、いささかなりと広島のために貢献したいと考えている。

退職後暫くは、頼まれながら果たしていない著述のしごとに忙殺されそうであるが、これからは自由な時間が持てるであろうことも楽しみのひとつである。人生に終りはないという気持ちで、今後ともがんばってゆきたいものだ。

(地域文化コース アジア研究)

御専門は中国文学です。昭和21年に東京文理科大(現筑波大)漢文学科を卒業されました。同年から旧東京高等師範附属中学校の教壇に立たれ、その後東京師範学校に勤務された後、昭和27年より東京教育大(現筑波大)で教鞭を執って来られました。東京教育大での御勤務は23年の長きにわたり、その間昭和43年には文学博士の学位もとられています。昭和51年に総合科学部に赴任され、以後活発な研究・教育活動を続けられました。

少年老イ易シ

松下 亮



少年易老学難成。朱熹の「偶成」と題するこの詩は、若者に訓戒を垂れる好材料としてよく知られている。しかし月並ながら六十歳をすぎた私が口に出して呟くとき、まさに現在の心境を端的に表わしてくれるものとして心にしみる。大学に籍を置いて三十数年ドイツ文学の研究に携わり、ドイツ語の初級・中級(まれには文学)の授業を担当して来たが、大した研究成果をあげたわけではなく、優れた教え子を育てるという立場にもなかった。

一寸光陰不可軽。われわれを鞭撻するこの句は、逆にこのことが如何に至難の業であるかを示している。私は中学のはじめから小説に読み耽って勉強をおろそかにした感が強い。戦争のため旧制高校在学中に現役兵として入営させられ、学業を放棄せざるをえず、兵役中の大半の時間は戦病兵として兵站病院のベットですごした。一寸ノ光陰どころではなかったのである。大学教員としても安保闘争・大学紛争による空白期間、数度病気による入院もあった。

未覚池塘春草夢。文学少年だった私はフランス文学に憧れた。三十歳代には地方同人雑誌に創作を発表したこともあった。或る中国人に「汗牛充棟」と評された蔵書をひもどく暇が残されていることかしら。

階前梧葉已秋声。しばらくは他の大学でドイツ語を教え、ハイネの研究に従事しつづけることになる。漢詩に托して往事を追懐し今の心境を述べて別れのことばとしたい。

(外国語コース ドイツ語)

御専門はドイツ語です。昭和28年九州大学を卒業され、引き続き同大学院でドイツ語を深められました。昭和30年に大学院を修了され、同年宮崎大学に赴任されました。その後佐賀大学を経て昭和43年に当時の広大教養部に着任されました。しかし3年後、九州大学に御転任。以後9年、同大学で教鞭をとられました。昭和55年、9年ぶりに広島に戻られ、以後総合科学部でドイツ語の初歩からじっくりと学生に教えてこられました。